用水開削の祖

市川 五郎兵衛（いちかわ ごろべえ）

一五七二年～一六六五年

米は古くから日本人にとって、いちばん大切な食べ物であるが、水がないと稲が育たない。五郎兵衛は多くのお金と砥石山のトンネルを掘る技術をつかって用水を完成させて広い水田を切り開いた。

生いたちと信念

市川五郎兵衛真親は、一五七二（元亀3）年に上州（現群馬県）南牧に生まれ、子どもの頃は市左衛門と呼ばれていた。その頃の日本は戦国時代のさなかで、武士たちは自分の領地を広げようと争いを続けていた。

市川一族は甲州（現山梨県）の武田信玄のもとで戦って手柄をたて、佐久の蓬田・桑山などの土地をもらっていた。しかし、いく度かのはげしい戦いで、祖父や一族の人々は死んだり、けがをするなど悲しいできごともあった。

信玄が亡くなり、その子の勝頼が織田軍によって滅されると、市川一族は南牧で、山の畑を耕して麦や雑穀をつくっていた。村はV字型の急な斜面ばかりで、田をつくる土地がなかったため、砥石を採掘し、それを売るなどして暮しをたてていた。

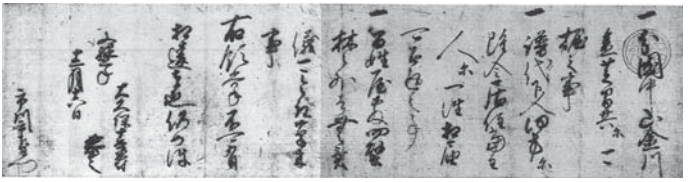
徳川家康が江戸に入ると、守りを固めるために、市川氏にも仕官するようにとさそってきた。父の真久は二二歳の五郎兵衛を一五九三（文禄2）年に江戸城へ向かわせた。家康の前に出た五郎兵衛は、「志すでに武に非ず、殖産興業にあり」（武士になって戦うより、産業

をさかんにすることにつとめたい）と答えたため、「家康の領土では土地の開拓を認める」という朱印状を家康から与えられたと伝えられている。

用水開削の苦労

五郎兵衛は朱印状を持って佐久に入ると、まず湯川の水を引いた三河田用水（約四・五キロ）により三河田新田を開き、続けて常木用水の水で市村新田を開いた。さらに新田を開発するため、千曲川の西に広がる矢島が原に水をひこうと考えた。はじめは千曲川から水を取り入れようとしたが、川の水が低いところにあったためひくことができなかった。

そこで南にそびえる蓼科山中に分け入り、岩の間から湧き出してい



文禄２年に徳川家康からもらった朱印状
（市川恒世氏所蔵）

た「五斗水」を岩下川（現細小路川）に落とし、春日の湯沢川（現鹿曲川）との合流点付近で水の取り入れ口をつくり、矢島が原まで堰（水路）をひく計画をたて、一六二六（寛永3）年に小諸藩から用水開削の許可を得た。

堰は取り入れ口から鹿曲川に沿って、山の斜面の岩を削って掘り進められた。片倉と布施の間の山は、三二七メートルのトンネルを掘り、川や沢を横切る場所は木の樋を渡して水を流すことにした。

トンネルは山の東と西の両方から掘り進められたので、うまくつなげるには高い技術が必要であった。五郎兵衛は南牧の砥石山で働いていた技術者を呼びよせ、測量の仕方やノミの使い方を佐久の人々にも教え、これを見事成功させたと伝えられている。暗いトンネルの中には灯りを置いたあとが今でも残されている。

五郎兵衛新田を流れる築堰
（昭和31年頃　碓氷髙氏撮影）

用水の工夫と技術

水を流すためには堰に傾斜をつけなければならない。五郎兵衛たちは、水を使って水平を測り、用水を水の流れやすい傾斜にしたと伝えられている。

トンネルを出た堰は東へ下ると、布施川を長い木の樋で渡し、布施川の東を百沢（ももさわ）の近くまで進むと、山の斜面を掘り、丘をまわりながらくねくねと上原（かみはら）まで掘り進められた。

矢島が原の全域に水をいきわたらせるために、堰は高い所を北へ向って掘られた。ところが上原と下原（しもはら）の間に低い所があって、水を通すことが出来なかった。

そこで土を盛って固めた高さ約二・四メートルの土堤の上に、幅一・五メートルの堰を掘った土樋（築堰）を築いたが、水が漏れたり、穴が開いたりしてしまった。人々は芝を切りとったものを重ねて木の杭を打ちこみ（でんがく積み）、真綿をちぎって流して穴をふさぐ（わとうずみ）などの工夫をした。これらは五郎兵衛の妻きよの助言によるものと伝えられている。

このような苦労により堰が完成し、一六三一（寛永8）年頃から開墾が始まった。五郎兵衛は南牧の人ばかりでなく、佐久の人々にも分け隔てなく開墾を勧めたので、田んぼはみるみるうちに広がった。

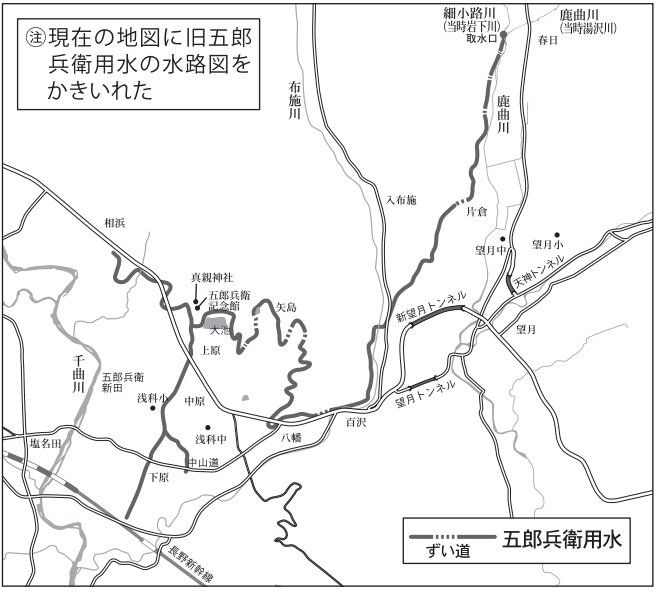
草原だった矢島が原には新しい田が開かれ、四年間で四三九石（一石は一八〇リットル）もの米がとれるほどになった。その後八七〇石ものおいしい米がとれるまでになり、上原・中原・下原に新しい集落が生まれた。

長さ二〇キロメートルの堰をひらくための資金は、砥石を売った金が使われたが、足りなくなってしまった。困りはてた五郎兵衛は、千両箱に砥石をつめて、馬で村に運んで、村人たちを安心させたという逸話が今も語りつがれている。

五郎兵衛の徳をしたう村人

七〇歳を越えた五郎兵衛は、土地や用水の権利を求めることはせず、いったん故郷の南牧に帰り、用水をつくるために借りたお金を返すために、砥石山の半分を浅草の商人に売ってしまった。その後も上野原（御牧原）の開発を計画したが、これは実現できなかった。

一六六五（寛文5）年九月九日、五郎兵衛は九四歳で亡くなり、遺言によって矢島が原の用水や田んぼが見わたせる木瓜峯に葬られた。村人



五郎兵衛用水の概略図

たちは五郎兵衛の徳をしたって真親神社を建て、後に村の名前を五郎兵衛新田村とした。

五郎兵衛新田の人々は堰を守り、大切な水を公平に分ける五郎兵衛の教えを守って、米づくりにはげんだ。五郎兵衛用水の成功を見た六川長三郎や佐久の人々は、その後塩沢、八重原、御影などの台地に堰をつくって美田を開いたので、佐久は米どころと言われるようになった。

五郎兵衛用水のトンネルは今も残り、朱印状など当時を語る品々は、五郎兵衛記念館で見ることができる。

参考文献

伊藤一明『五郎兵衛と用水』財団法人信州農村開発史研究所　一九八二

齋藤洋一「五郎兵衛・権右衛門による御牧原開発計画」

（『佐久市五郎兵衛記念館古文書調査報告書』二〇一二）